

「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」

天沢退二郎さんに聞く —21 世紀の宮沢賢治—

可能性の宝庫としての「宮沢賢治」

2012 年 10 月 6 日 (土)

国際子ども図書館ホール (3 階)

<講演>

講師：天沢退二郎氏

三つのキーワード：21 世紀・子どもの文学・可能性の宝庫

21 世紀の宮沢賢治、21 世紀ということと、それから国際子ども図書館の日本の子どもの文学の展示会での講演会と聞いてきましたので、子どもの文学ということでお話しします、といっても宮沢賢治という人は、子どものための文学、童話だけを書いたのではなくて、詩もたくさん書きましたし、また、一口に賢治童話と言われるものの中にも、子どものためと限定するようなものではないお話もたくさんあるわけで、つまり、子どものための文学というのは宮沢賢治にとって重要なキーワードでありますけれども、これで全部をカバーするわけではないのです。一方で、今日の僕のお話の基本的なタイトルとして、宮沢賢治というのは可能性の宝庫であるということを申し上げてあります。

そこで、「21 世紀」ということと、「子どもの文学」ということと、それから「可能性の宝庫」、この三つのコンセプト、あるいはキーワードが今日の僕の話全体の言わば枠組みみたいなものになっているということ、一応御承知おきいただきたいと思います。

三つのキーワードと申しましたが、二つにすることと、三つにすることには大きな違いがありまして一二つであればつまり二つのテーマとか二つのキーワード、A と B というふうなテーマの立て方になるわけですが—この間、『現代思想』の柳田國男特集（「総特集 柳田國男：『遠野物語』以前/以後」『現代思想』40 卷 12 号臨時増刊、青土社、2012.10）というものが、皆さんの中にも御覧になった方がいると思いますが、そこでは柳田國男、佐々木喜善、宮沢賢治と、この三つを頂点に置く三角形というものを考えて、いろいろなことを展開していったつもりなのです。

三角形というと、レヴィ=ストロースの有名な「料理の三角形」（『レヴィ=ストロースの世界』クロード・レヴィ=ストロース著、西江雅之訳、みすず書房、1968 所収）というのがありまして、およそ料理というものについて考えるときに、熱を加えたもの、生のまま食べるもの、それから腐らせたもの、という三つの料理の三角形を組み立てて、そこであらゆる食品について、論じているわけです。こういう三角形を作りますと、いろいろなことを同時に、ABC と三つ縦に並べて順々に書いたりするよりも柔軟性のある展開ができる。ということで、僕は何かといえばまず三角形を作って話を、あるいは文章を書く、ということが癖になっているわけなのです。また、もう大分前にある大学で、グリム、アンデルセン、賢治、この三つを頂点にする三角形というのを考えて話をしましたが、そうしますと、グリム童話、アンデルセン童話、賢治童話というだけではなくて、それぞれの共

通した問題とか、あるいは、全然違うものとかが出てきます。

このグリム、アンデルセン、賢治の三角形については、そのとき授業で話してまだ文章化していないのですが、今日とはとにかく 21 世紀、それから、子どもの文学ということ、それと可能性の宝庫と、この三つのコンセプト、キーワードを頭に置いてお話しますので、よろしくお聞きとりください。

三冊の宮沢賢治童話集との出会い

そこで、まず皆さんにお配りしている三つの資料の一つに、昭和 10 年代に出された 3 冊の宮沢賢治代表作集の目次があります。これはただ単に、昭和 10 年代というだけではなくて、僕は小学校 2 年、3 年のときに、賢治の代表作といわれる童話はほとんど全部読んだわけですが、それがこの 3 冊の子ども向け童話集によるものだということです。

最初に『**風の又三郎**』（宮沢賢治 著、羽田書店 昭和 14 年）¹という羽田書店から昭和 14 年に出た童話集をまず親が借りて来て、僕はこれを読んで、かなり面白かったわけです。

その次が『**銀河鉄道の夜**』（宮沢賢治 著、野間仁根 絵、新潮社、昭和 16 年）、これは新潮社で昭和 16 年に出たものです。これについては、僕の知っている限り復刻版が出ていなくて、何が入っていたか分からなかったので、急いで明治学院大学の言語文化研究所—以前私が所長をしていた—に電話して調べてもらって、「銀河鉄道の夜」「なめとこ山の熊」「雪渡り」「茨海小学校」「ツエねずみ」「水仙月の四日」の 6 篇が載っているということを教えてもらったのです。それでこの配布資料でここだけが僕の手書きのメモになっている、というわけです。

それから『**グスコーブドリの伝記**』（宮沢賢治 著、羽田書店 昭和 16 年）、これは親に買ってもらいました。僕は満州からの引き揚げ者ですから、いろいろなものを、ほとんど満州に置いてきてしまって、特にこの『グスコーブドリの伝記』などは戦争に負けて日本人が皆、散り散りになる直前に、同じクラスの女の子に貸したまま戦争が終わってどさくさになってしまったのですが、戦後になって復刻版が出たおかげで手にすることができているわけです。

とにかくこの 3 冊が子ども向けの本として、まず昭和 10 年代に出て、日本中の不特定多数の子どもを読者としていたのです。

それ以前に賢治が死んだ翌年から、『宮沢賢治全集』（高村光太郎等編、文圃堂書店、昭和 9 年）というのが早くも出始めていて、つまり僕が生まれるよりも—僕が生まれたのは昭和 11 年、1936 年ですが—一前に、もう全集が出ていたわけです。それから、昭和 10 年には、『宮沢賢治名作選』（松田甚次郎編、羽田書店、昭和 14 年）というアンソロジーが、羽田書店から出ていて、これは主な童話もいろいろ入っているけれども、詩もたくさん入っているし、農民芸術概論も入っている、文語詩もいろいろ入っているというもので、必ずしも、子ども向きの本ではないです。

僕は子どもとして小学校 2、3 年でとにかく読んで—それから何十年経つのか、数えればすぐ分かると思いますが—、宮沢賢治作品に僕が関わってきてしまったその始まりは、この三つの童話集からだったということです。この三つの本に、子どもの文学ということで

¹ ※国際子ども図書館の所蔵は 1971 年ほるぷ社による復刻

注目すべきものがほぼ入っていて、だぶりがほとんどないということは、やはり宮沢賢治の弟の宮沢清六さんのアイデアによって、この3冊が組み立てられたのではないかと思うのです。

イーハトヴー可能性の宝庫

ここで、一つの重要な資料として、宮沢賢治の『注文の多い料理店』という1924年に出た童話集²の広告チラシがあります。『注文の多い料理店』は賢治の生前刊行したまとまった唯一の童話集で、これと『春と修羅』（宮沢賢治 著、関根書店 大正13.）が、生前刊行の唯一の詩集、この2冊だけを出しています。

新校本全集（『<新>校本宮沢賢治全集、第12巻』筑摩書房、1995.11）の「注文の多い料理店」の校異編にある広告チラシコピーを資料として皆さんに差し上げました。「注文の多い料理店」広告チラシ大、というのは、書いていないけれど作者自身の筆になるものだということが一目瞭然というか、賢治の作品集や童話集、全集などにはもう随分昔から一もちろん宮沢賢治が死んだ後ですけれども一序と称して印刷されているので、作者自身の筆になるものとしてよく知られているものです。しかし誤植があったり、またさらに誤植が加わったりしていることがあるので、やはり実物やそのコピー、あるいは全集の注付きのもので、確かめていただきたい。

この、『注文の多い料理店』では、この作品全体の『注文の多い料理店』という総タイトルの上に「イーハトヴ童話」という、肩書きみたいなものがついていまして、これ全体がイーハトヴ童話である、ということが宣言されています。

お配りした資料の中の、左側のページの上の一番左の終わりのところに、「注文の多い料理店（この題名赤刷り）はその十二巻のシリーズの中の第一冊で先づその古風な童話としての形式と地方色とを以て類集したものであって次の九編からなる。」というふうに書いてあって、ローカルカラー（地方色）—イーハトヴは日本岩手県であると言っています—ということ、岩手県の地名や、人名やあるいは岩手方言などが、至るところにあるので見て取れるわけですが、後に賢治は『銀河鉄道の夜』とか、『ポラーノの広場』など、岩手ではない地名、イーハトヴが地名になっている童話をたくさん書いておまして、大きく分ければ、イーハトヴバージョンと、岩手バージョンと、賢治童話の全ては、大体この二つに分類される、という訳です。

けれども、しかしそういうものを含めてイーハトヴ童話というふうに名付けてあるということで、賢治は、イーハトヴというものを作品の中心的な、一番重要な世界の目印である、というふうに考えているわけなんです。

ここにおいて、お配りしたコピーの右側、さらに枠で囲ってありますが、下の段に、「実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもつて実在したドリームランドとしての日本岩手県である。（この行改行赤刷り）そこでは、あらゆる事が可能である。」というふうに一言で言っているわけなんです。「そこではあらゆる事が可能である」、つまり今日のテーマの一つ、可能性の宝庫という問題がここで出てきているということに着目していただきたいわけです。「そこでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛

² ※国際子ども図書館の所蔵は1969年日本近代文学館による復刻

躍し大循環の風を従へて北に旅する事もあれば、赤い花杯の下に行く蟻と語ることもできる。」というこの 3 行では、「ここではあらゆることが可能である」ということを二つの例をあげて、一気に要約しているわけですね。

「人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従へて北に旅する事もある」ということは、言わば、この作品の世界というのは、国境とか、あるいは言語の違いとか、とにかく国境などというものは全く眼中にない世界であるのですね。やれ、日本だ、いや、中国だ、いや、韓国だとか、そういうことは全然話にならない、あらゆるところを風と共に飛びめぐる、ということがイーハトヴでは可能である、ということがまず言ってあるわけです。

蟻と語るということ—可能性の象徴として

さらに「赤い花杯の下に行く蟻と語ることもできる」、ここの重要性を今日はちょっと注目して、強調しておきたいと思うのです。「蟻と語る事ができる」ということは、一体どういうことかと。

ここで、ヤノマミ族の神話を元に、「蟻と語る」というのはどういうことかをまとめて考えていただきたいと思います。数日前にテレビでヤノマミ族という、まさに原始時代の文化の担い手としてブラジルの奥地に現存するある一族のところに、スタッフが 150 日間泊まりこみ、そこでこの人たちの許しを得てカメラを回し、いろいろな話を聞き、そして作り上げた番組を見たのです。

ベーリング海峡がまだ陸続きだったときに、大勢の人たちが、ユーラシア大陸から南北アメリカ大陸へ移って行き、インディアンとか、インディオとか、今言われている人たちになったわけですが、その中で特に南米へ行った人たちというのは、大体、スペインやポルトガルによって征服されて、その間に、滅んでしまった民族もたくさんありますし、そうでない場合には、ポルトガル語やスペイン語の世界に影響を受けて、ヨーロッパ的な様々な文明や文化が混在して、人種的にもヨーロッパ人と従来のモンゴリアンとかが交わり合っているのですが、このヤノマミ族というのは、モンゴリアンで、ベーリング海峡を越えて、来た時以来のいろいろな神話とか、文化とか、しきたりとか、そういうのをいまだに保ち続けているわけです。

僕のレジュメの右側の 2 ページ目の下から 10 行くらいのところに重要なことをメモしておきましたが、ヤノマミ族では人は、まず赤ん坊として「オギャー」として生まれてきたときは精霊なんです。人は、子どもが生まれると、精霊のまま天に返してしまう。つまり、母親は、すぐに産んだ子どもの口の中に草を詰め込んで殺して、それを蟻に食わせてから、蟻の巣もろとも燃やしてしまう。そうでない場合には一人間として受け入れる場合には一母親が抱いて、乳を飲ませて育てるといふ。殺して精霊として天に返してしまうか、あるいは、人間として育てるかということ、生んだ母親が決めるわけですが、人はここでずっと人間として、育てられて大きくなって、そして最終的に、また死ぬと精霊になって天に帰っていくわけです。ただし精霊として天に帰ってそれでおしまいなのではなくて、精霊としての寿命もあって、またいろいろな形で地面、地球上へ降ってきて、そこでいろいろな虫になる。虫になって、死んだり生まれたりするわけですが、最終的には蟻になって地に帰る、というわけです。これがこのモンゴリアンの、1 万年以上前にユーラシア大陸か

ら運び込んだ神話です。

ヤノマミ族の人たちというのは、顔を見るとやはり我々と同じようなモンゴリアンの顔をしていて、それから刺青をする文化があって、これはアイヌに共通したところがあるわけで、宮沢賢治はやはりアイヌに非常に興味を持っていて、金田一京助という人がアイヌの研究をしていましたから、宮沢賢治の童話にも、アイヌ、あるいは、アイヌの神話が非常に深い影を落としているということは、最近、秋枝美保さんの研究などでもいろいろ明らかになっていることですが、つまりヤノマミ族のことを考えるときに、宮沢賢治が、蟻と語ることもできると。

ここで先ほど申し上げた宮沢賢治の3冊の昭和10年代に出た童話集の目次を見てみますと、賢治の童話の中で、つまり子どものための文学の中で、多くの馬や兎や、蟹や、リスや牛や蟻、というのが出てきます。しかし、具体的に蟻がしゃべる童話というのはこの中にはないですね。ただ、『鹿踊りのはじまり』の中に、歌の中に、全く誰も通らない、蟻さえも通らない、というふうな表現で「蟻こも行かず」というように出ている。他には、蟻は確か、『ツエねずみ』で、蟻の兵隊が出て来て、それから『蟻ときのこ』にも出てきますけれども、普通の童話ではあまり蟻は出てこないです。

蟻さえも出てこない、蟻と語ることもできる、というところから蟻は一つの極限的な形態であり、宮沢賢治の童話では、極大と極小の間にあるさきほどのいろいろなもの—馬や兎や、蟹や、牛や蟻—が実に様々に駆け巡るわけですが、イーハトヴ童話の中であらゆることが可能である、と言った時に、蟻と語ることもできる、というところが、非常に強調になっている、ということを申し上げたいです。

賢治童話の可能性—動物たちとの会話

賢治の童話には、いろいろな鳥や昆虫や魚や、あるいは、植物やいろいろな生き物が出てきて、口をきくという話がたくさんあるわけですが、これについて例えば最近まで、宮沢賢治の童話は非常に欺瞞的であると、柄谷行人さんが非常に強いことを言っていたのです。賢治童話でたくさん使われている擬人法に柄谷行人さんが着目して、擬人法というのは、人間が動物、魚や虫や鳥や何かに、人間の言葉をしゃべらせて、そしてお話を作っていく、ということは、当の動物たちにとっては迷惑な話で、これは逆に言うと、人間と動物たちの境をなくしてしまうことで、これは欺瞞的だというようなことを、柄谷さんはおっしゃったわけです。柄谷さんのそういう考え方に対して、既にいろいろな反論がいろいろな人から書かれていますけれども、ここで、*bête*、すなわち動物、宮沢賢治における *bête* と話をする、ということはどういうことか。*bête* というのは、フランス語では日本語の獣なんていうのと違って、もっと広い意味で使われていて、昆虫のことは、*petite bête* 小さな *bête* と言って、虫のことを、他の象や牛なんかと区別しないで、*bête* という言葉で言っているのです。ですから、宮沢賢治の童話を見ると、昆虫も鳥も、猛獣もいけば野ネズミや蟹や、いろいろな動物、いろいろな *bête* が人間の言葉をしゃべるような形になっている、ということです。

ただここで、*bête*、動物たちが賢治の童話の中で、人間の言葉みたいなのをしゃべっていますが、しかし、これは擬人法なのであろうか、というと、そこは非常に疑問があります。例えば『なめとこ山の熊』で、小十郎が、ほとんど動物としゃべったりしたことがなかつ

たわけですが、ある時点で一熊の親子が、向こうに花が咲いているのを見て、「あの花何か知ってる？何か知っているか？」ということ話し合う所があって一、直前に、小十郎は、熊の言葉だって分かるような気がした、と言っておいて次にすぐ、熊の親子の話題が出てくるんですね。ということは、あの熊の親子の言葉は、一応童話としての便宜上、古い童話や寓話の形式を借りて、日本語で書いてありますけれども、しかしあれは、日本語ではないんですね。熊の言葉だということが、非常にはっきりと言われているということですね。

そのことは『鹿踊りのはじまり』でも、あるところで嘉十という若者が、鹿たちがぐるぐる回っているのを見ているわけですが、そこで「キーン」というふうな耳鳴りみたいな音がして、そして急に、鹿の言葉が分かったという言葉が書いてあって、嘉十という若者が聞き取ったのは、鹿の言葉であるということは、歴然としていると思うわけです。このように宮沢賢治は、一応童話としての古典的な形式上、擬人法になっているみたい、と書いてありますが、しかしあくまでここは子どもたちのために、あるいは我々読者のために、ああいうふうに書いてあるので、写されている言葉は、熊の言葉であり、鹿の言葉であるということですね。さらに、最近テレビで、西洋人の女の人が動物の言うことが分かるというようなことで出て来て、そして、動物の鳴き声などを聞いて、今はこのようなことを言ったんだというふうなことを我々に聞かせるわけですが、あれもおそらく擬人法ではなくて、その動物の言葉が分かったのだというつもりなんですね。

しかし例えば鯨が鯨同士で、ある信号を送って、意思を通じ合っているということはもう既によく知られているわけで、あれは人間にはとても何を言っているのかよく分からない音声ですけども、しかしコミュニケーションしているんだということはかなり前から分かっているんですね。さらに最近では、日本で鳥の群れが人間の近くに住んでいて、例えば、ごみ集積所みたいな所に集まってきて、人間が捨てたごみをあさって、やりたい放題に食い散らかしたりするわけですが、あのときの鳥の鳴き声というのは、既に学者がよく研究していて、二通りくらい違いがあって、そのうちの一つは、遠くにいる他の鳥たちに、ごみを集積しているということについての通信を送っているのだ、ということは、テレビでも紹介されているわけです。

それから、あるいはイルカとか、いろいろな分かりやすい動物たちの例で、*bête*、動物たちというのは、やはり彼らなりの言葉を使っている、そして人間には感じ取れない波長の音を聞き分けているということも、随分昔から知られているわけです。鹿には鹿の言葉、熊には熊の言葉、というものが互いに皆ある、ということは、もう既に常識になってきていて、それをただ人間の言葉にして、お話に組み込んでしまうということに問題があるといえ、もちろん問題があるけれども、しかしそれはやはり一種の翻訳というもので、翻訳が認められないとすると、地球上の人間同士が、何も話し合えなくなってしまうわけですが、そうではなくて、このことについては、僕自身の例で二つ申し上げたい。

家でしばらくの間、猫を飼っていたことがありました。うちの娘が子猫を公園から拾って来て、生まれて間もないくらいの猫を、17年飼っていたわけですが、一番なついていたのはもちろん拾ってきた娘であり、またほとんど一緒に寝たりするのは女房だったわけですが一この話もまた宮沢賢治に関係があるのですが一宮沢清六さんを囲んで新宿のどこかで集まりを持って、いろいろ話を聞いたり飲んだり食ったりしたことがあるわけですが、

そのときに、僕も女房も、それから娘も、幼い息子もいたのですが、そこで女房と息子は遠からずのところ、女房の実家があって、そこでそのまま泊まるということになって、あくる日早朝に僕と娘だけ戻ってきたんです。そして娘は予備校に直行すると、僕だけ家に帰ったんですね。そうしたら、猫が、僕に向かってしゃべったんです。これはもう実に延々と「夕べ、どうして帰ってこなかったんだ。」みたいなことを、この猫はこんなにおしゃべりだったとは知らなかったくらい血相を変えてなじって、それで気が済んだらしく、向こうへ行ってしまったんです。その時には、猫はそういう意味のことを言っているということが、実によく分かったんです。それは別に猫が人間の言葉をしゃべったわけではない。しかし僕も猫語が分かったわけではない。しかし猫はそのとき、そうやって僕の朝帰りを咎めたことは実に明瞭だったわけです。

このように、そういえば私も覚えがあるという方が皆さんの中にも随分いらっしゃるのではないかと思います。動物の言葉というのは、そのシチュエーションによっては明らかに分かる。僕はあの猫に怒られたあの場面を童話に書くならば、そっくりそのまま人間の言葉にして書いて見せることができる—と思うわけです。

それからもう一つ、うちの屋上によく鳥が来るのですが、屋上に鳥が寄ってきて一屋上には階段で下から上がっていけるようになっている、つまり鳥が階段を下りてこられるようになっているわけですが、下の部屋に女房が居たのですが、鳥がカァカァ言いながらその階段を覗いていたんです。それで女房がそっくり真似て、カァカァと鳥の言葉で、一生懸命応答して、そうしたら今度は鳥が興奮して次々に階段を下りてきたんですよ。さすがにうちの女房もやめて追い返したそうなんです。これは鳥が女房のしゃべった言葉を鳥語として明らかに理解したんですね。それで怒って同じように鳴きながらどんどん階段を下りて来た。

この例を見ても、人間だって真似すれば鳥の言葉、鳥を興奮させて引き寄せる力を一あれは喧嘩を売りにきたのかしれませんけれども一持つことができる、そういう例として、今の二つを申し上げておきたいわけです。

とするとましてや、賢治の童話の中に出てくる、例えば『やまなし』の中で蟹が言葉をしゃべりますが、賢治が直感と想像力が合わさったものによって蟹の言葉を了解している。蟹が人間語を読めるようになって賢治童話を読めば、必ず自分たちの言葉で翻訳するに違いないと思うわけですが、それは別として、『ゼロ弾きのゴーシュ』ではゴーシュがゼロを弾いていると、毎晩のように動物たちが寄って来るのですが、そのやりとりというのは、ゴーシュが一晩中、暗くなるまで、もうゴーゴーゴー弾いて弾いてついに最後ボタンキューと寝てしまうぐらいになるまでゼロを弾いたわけですが、そういう具合に入れ込んだ時のゴーシュの精神状態というのを考えると、彼らが人間語をしゃべったのではなくて、ゴーシュが、猫語やタヌキ語やなんかを理解したというように宮沢賢治は了解したのであって、あれは、いわゆる擬人法ではない、ということですね。このことを強く申し上げたいです。

そして 20 世紀から 21 世紀に入って、多くの動物学者たちによって、既に鳥やクジラや様々な動物の言葉というものについて、どういう場合に、こういうふうな音を出すんだ、というふうなことが理解され始め、さらに人間はコンピュータという、いわゆる「ツール」、優秀な武器を手に入れたわけです。一武器と言ったらおかしいですが—。このコンピュータ

によって、熊語、鹿語というようないろいろな動植物の言葉を（植物には植物の声の出し方があるでしょうから）人間には聞き取れない波長の音まで聞きとって分析すれば、擬人法については一先ほど、柄谷行人さんのことを言いましたが、さらに、西成彦さんなども、宮沢賢治における擬人法というものが持っているいろいろなマイナスの側面みたいなものを指摘していらっしゃる一、21世紀の宮沢賢治というところで、その概念を完全に考え直す時が既に間近になっていると思っています。

僕ももうじき寿命がきますから、そこまで生きていないに違いがありませんが、皆さんにはぜひ、動物と人間の言葉による理解ということが、いずれそんなに遠い先ではなく分かるであろうということを一例え、鳥たちが作った文学作品の中で人間がどのように言われているか、というようなことも鳥文学を研究すれば分かるというように一今日の一つの重要なポイントとして申し上げたいと思うのです。

21世紀の宮沢賢治—児童文学として

それから、さらに児童文学と宮沢賢治ということを考える場合に、21世紀になったら、やはり違う認識の仕方、あるいは、了解の仕方、あるいは、読み解き方というふうなものが挙げられるということをお願いしたいために、平塚武二さんのエッセイの一部をお配りしてあるので、ちょっと見ていただきたい。

昭和24年の11月に刊行された『白象』（白象社、1巻1号1949.11）—しろぞうと書いて、はくしょうと読むのですが—という季刊誌の第1号のちょうど真ん中くらいに評論として、平塚武二の「児童文学の前後」というものが載っている。これは昭和24年ですから、僕が中学1年の時ですが、中学生になって間もなく、熱狂的な児童文学少年になりまして、『日本児童文学』という日本児童文学者協会の専門誌とかですね、それから波多野完治の『児童心理と児童文学』（波多野完治 著 金子書房、1950）という専門書など、懸命になって読んで、それからいろいろ考えたり、僕の考える児童文学研究誌の目次を何通りも作ってみたりしていたわけです。そのとき一番注目したのは、この平塚武二の「児童文学の前後」というエッセイでした。それから座談会では、「アプレゲール児童文学とその将来」というのがあって、これも学ぶところも多かったけれども一僕が目から見ても問題のある指摘もいろいろあったんですが一、それは別として、この平塚さんのテキストというのが、非常に画期的なことが書いてあるので、コピーをお見せしたわけです。

お配りしてあるのはまだ昭和24年の段階の平塚武二さんの考えですが、130ページの最初に書いてありますように「まことに、まことに、児童文学の世界ほど、おんぼろの革ぶくろの古酒が賞美されつづけているところも珍しい」、「このクモの巣だらけな穴倉を整理しないかぎり、児童文学に眞の『戦後』はあり得ない。」と言っています。彼の言う児童文学の前後というのは、「戦前と戦後」ということですが、さらに、その下の段ぐらいになりますと、「この現状を正視し得ない限り、『戦後』を志向する資格はない。今日児童文学者を名乗る者の数は、児童文学者協会の会員数だけによって見ても百五十名を超え、他のいくつかの団体の会員を加えれば三百名を下るまい。これほど大盛況(?)にも拘わらず、『戦後』は生まれないのである。」と、このままではとにかくどうしようもない、ということが書いてありまして、その次の131ページの上の段に、「戦前の児童文学の本質の中核はヒューマニズムであり、その肉付けをしたものはリアリズムの手法であつたと、要約してい

ことが出来るだろう。ところで、この戦前の児童文学におけるヒューマニズムとは、どんなものであつたらうか。これも要約していえば、ヒューマニズムなどと、ハッキリいうことが出来るほど完備したものではなく、ごくお粗末なものであつたということである。それはトルストイが身を以て対決したようなヒューマニズムではもちろんなく、それを輸入して或る程度発育した成人文学におけるヒューマニズムですらなく、鉱石受信機でかすかにとらえたラジオでもきいた程度のヒューマニズムでしかなかつたのである。」というふうに極論しているんですね。そして「このお粗末な児童文学のヒューマニズムは、さらに不幸なことには、すでに当時からますます強化されはじめた軍国主義教育の足枷で、立ちあがるかあがらないかに、自由に歩くことを禁じられたのである。」と戦前の児童文学をこき下ろした挙句に、134 ページの、下の段を見ていただきますと、「戦前の児童文学を省察する場合、宮沢賢治を忘れることが出来ないが、宮沢賢治はとんでもないものであり、児童文学界での出来事というよりも、文壇での出来事であり、また、児童文学というよりも、『メルヘン』であり、その『メルヘン』としての驚きが、児童文学にも影響を与えたと見るべきである。たしかに、宮沢賢治は児童文学に大きな衝撃を与えたが、児童文学と『メルヘン』との本質的相違のゆえに当時の児童文学とは実質的に区別されねばならぬ。よくいえば驚きではあるが、悪くいえば宮沢賢治は児童文学にとっては一種のゲテモノであり、別格である。これはオスカーワイルドの童話が一種のゲテモノであるのと同じである。文学としての眞価の論議とは別である」というふうに、宮沢賢治はとんでもないものであり、ゲテモノである、というふうな言葉で言っていますが、しかしこれは貶しているわけではないんですよ。

その次をもう少し読んでいただきますと、「宮沢賢治が児童文学に衝撃を与えて、しかもなお別格視されたのは、また一つには、宮沢賢治の現れた当時の児童文学が、すでに相当実用的な（その実、実用にはならなかつた）『よい子童話』に近付きつつあつたためでもある。元来宮沢賢治の童話そのものが、特異人の異常な生命の火花のごときものであり、たとえ半身不随にしろ、ヒューマニズム童話という地味な思考の集積の所産であつた当時の児童文学とは、相容れないものがあつたからである。まして戦争に突入する以前の、ひねこびたヒューマニズムの思考の集積であつたに過ぎない当時の亜流児童文学にくらべたら、どっちが月でどっちがスツポンにしろ、けたのちがつたものである。」と、宮沢賢治というのは、一言で言うと凄いだということが、平塚武二によって徹底的に言われているわけです。

当時僕は中学 1 年で、日本の児童文学の坪田譲治とか、小川未明とか、それから当時有名だった石井桃子の『ノンちゃん雲にのる』（石井桃子著、大地書房、1947）とか、あるいは、青木茂の「三太物語」（『三太物語：小説』青木茂 著、野間仁根 絵 光文社 昭和 26）とか、いろいろな戦後児童文学の有名な作品を次々読んで、面白がったり貶したりしていたわけですけども、そこで平塚武二のこの文章が中学 1 年になりたての児童文学おたくにとって、どんなに衝撃だったか、ということがお分かりいただけるかと思うわけです。そして恐らく、これに近い大きな桁外れのショックというものが、21 世紀の子どもの文学というものを待ち構えているのだらうということをごひ、申し上げたいです。

そのうちの一つは先ほど少し申し上げた、擬人法の問題というのがあるわけですが、賢治の童話で、いろいろな動物が口をきく話で特に、『ツエねずみ』『クねずみ』というよう

な、宮沢賢治自身が寓話と称したものが大分あります。これらは谷川徹三の賢治童話集『銀河鉄道の夜：他十四篇 童話集』 宮沢賢治 著 谷川徹三 編. 岩波書店, 1951)、岩波文庫にあります。そこで谷川徹三が「これは寓意があまりにあからさまであるうらみがある」ということを最後の一言に付け加えていたのです。それで宮沢賢治も一応、これら『ツエねずみ』『クねずみ』や『鳥箱先生とフウねずみ』、あるいは『猫の事務所』というようなものにおける動物の口のきき方には、若干擬人法的な思いもあったかもしれないわけですが、それは彼自身も分かっている、特にそういうものを一括りにして寓話と言ったりしていたのです。

しかし先ほど言いましたように、宮沢賢治における、動物が口をきくというよりも、作中の人間たちが、動物—あるいは蟻に至るまで一つまり *bête* と語ることができる、*bête* の言葉を理解する、あるいはさらにそこから発して、(我が家の例のように) 怒った鳥がどんだん部屋に踊りこんでくるというぐらいのことは、21 世紀には根本的に明らかにされるだろうと思うわけです。

21 世紀の宮沢賢治—宇宙の広がりの中

それからさらに、ここではもう詳しく申し上げる時間がなくなりましたが、宇宙論についても、例えば『銀河鉄道の夜』で、始めのほうに先生の話があるわけです。そこで銀河というのはよく見ると、皆小さな星である。というようなことから始まって、銀河についてのいろいろなことが書かれてあるわけです。これは最後の黒インク手入れで書かれているので、ほぼ 1931 年、つまり 1933 年の死の直前のところで書き足された部分ですが、当時の宇宙論上の新しい発見が次々に行われた時期に、宮沢賢治は随分そういうものに、目を配っていたということがよく分かるのです。そこでも一瞬筆が滑って、こういうものがどのようにしてできたか、というところで、先生の授業で言わせようとして、しかし、さすがにそれは途中で止めて、それから後のことについては、次の時間にお話ししましょう、「これがつまり今日の銀河の説なんです」と。自分の授業には、そういう意味で限界があるということをはっきり言っている。しかしさらに、1924 年には『銀河鉄道の夜』の初期形ができていますが、この年にハッブルが銀河系外にアンドロメダ星雲を位置づけ、1929 年に同じハッブルが宇宙の膨張説を出しています。そして『銀河鉄道の夜』の黒インクによる最終手入れは 1931~32 年、こう考えると、1930 年代以降に宇宙論が次々に新しい展開を示すことを、賢治がもう予見し予告していたに違いないことがわかります。

人工衛星に望遠鏡を載せて、それを地球の表面からかなり遠くまで飛ばして宇宙を観察する、さらには、クエーサーというのを使って、光線、光だけではなくて、電気とか、宇宙線とか、いろいろなものをキャッチすることができる。例えば太陽の黒点というものについて、皆さんも興味のある方は御覧になっていると思いますが、テレビでは、随分最近の発見を次々、画像を使って紹介していますし、宇宙の中心のさらに向こう側から見ると、宇宙がどんな映像をしているかが分かるということが、いろいろな手立てを使って明らかにされつつあって、この銀河系という宇宙を真上からみた場合に、こういう螺旋状の渦になっている、というようなことがようやく分かってきました。これが分かっただけで、『銀河鉄道の夜』の最初の章にたちまち今日の説が書き加えられたに違いない、ということが既に 21 世紀になって数年でもう明らかになってきているわけですね。そうしますと、この

『銀河鉄道の夜』を初めとして、宮沢賢治における宇宙、あるいは太陽系というものについて見ると、21世紀の宮沢賢治というのは、随分様変わりしていく、というか、宮沢賢治がたちまち古くなるとかいうことではなくて、我々が新しくまた、いろいろなことを考えることができるということだと思います。

それから、どこかの宮沢賢治展覧会の解説で見たことがちょっと書いてありますが、『グスコーブドリの伝記』というのは、最近映画にもなりましたが、最初、賢治が童話を書き始めてから間もない1922,3年頃からそれほど遠くないうちに、『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』が書かれて、さらにそれから10年くらいの間に『グスコーブドリの伝記』になり、さらにその次を狙って、「ペンネンノルデ」というメモが書かれているわけですね—「ペンネンノルデ」のメモは、『グスコーブドリの伝記』よりも少し前に作られたメモではないかと思われるわけですが—。『ペンネンノルデはいまはないよ 太陽にできた黒い棘をとりに行ったよ』という長いタイトルのメモですけれども、ペンネンネンネンネン・ネネムの後身である、ペンネンノルデという人物は、今はいない、と。太陽にできた黒い棘を取りに行ったというふうになって、今はいないというのですが、この黒い棘というのはどう考えても、もちろん黒点のことを指す、と我々は想像できるわけですね。

太陽の黒点については、既に古くは、古代ギリシャの頃から知られていたわけですが、さらに、近現代になって、もちろん黒点は移動がある、生まれたり、消えたりすると。さらに黒点の運動には周期があるというようなことをもうかなり前から分かっていたわけですが、さらに20世紀、21世紀になって、新しい衛星に積んだカメラによって、今までより極端に近いところから、太陽の表面が映し出されるようになりました。皆さん御覧になっていると思いますが、この黒点というのは、点ではなくて、もちろんもう少し大きな、というかすごく大きな穴なわけですが、これは磁気と関係があり、それから宇宙線と関係があるというようなことが分かっているわけです。そしてこの周期というものが、古代から中世、近代にかけて、やはり10年周期くらいで寒冷気候が襲ってくるということが日本の古代・中世くらいから一点、それからヨーロッパでも一つ古文書に出てきているということが言われているのです。世界中にあちこちそういう古文書や古記録があって、そういうものを全部網羅的に調べれば、さらに通説、定説、あるいはそれを考え直すものがあると思うのです。

特に、「ペンネンノルデが太陽に黒い棘をとりに行った」というこの冒険は、SFでも簡単には書けないファンタジーなのですが、しかしそこでノルデが、太陽にできた黒い棘を取りに行ったというのは、異常気象、つまり、作物が取れなくなる冷害とか、そういうものの根本的な理由になっているのではないかということに賢治が空想を働かせていた、ということに違いないわけです。そうしますと、太陽にできた黒い棘というものが、そういう地球の農民にとって災いの元であるならば、これは地球だけの問題ではない。太陽系全体の問題なんですね。太陽の棘を除去することで、あるいはノルデが太陽の棘を取りに行って、棘を手術して、除き去るようなことをやってのけるならば、地球だけの問題ではなくて太陽系を救うすごいものになるわけで、つまり、宮沢賢治の考えていたこと、彼のメモというようなものを21世紀でさらに検討していくならば、地球上の米が取れるか取れないとか、というところの話ではなくて、太陽系を救うということになるのだらうと思うのです。

さらに最近のテレビ番組その他によると、およそ銀河というものが、無限の広がりではなくて、広さという点では有限であるということは随分昔から分かっているのですが、現在見渡す限り、見えないところまである宇宙全体の中に、まるで無数の銀河があって、その中に数えきれないほど地球型の惑星があり、こういう人間のような生物のいる可能性のある星というのはいくらでもあるということが分かってきているわけですね。そうしますと、そこでやっぱり地球文明と同じ程度かあるいは少し前か少し後かは分かりませんが、そういうところに、極論すれば一話の結論ですが—21世紀に何億という宮沢賢治が広い銀河系にいるんだということが分かってくる、そして何万光年か先のその世界の宮沢賢治は、我々の宮沢賢治に影響を受けている、とかということが、何かの機会に分かるかもしれない、ということになるのではないかということで、今日の三つのコンセプトをめぐっての話を、ただの空想ではなく、根拠のある話として一僕や女房が猫やカラスの話を聞き分けていますから一、今日のお話を終わらせていただきたいと思います。